

「くさめ」から「くしゃみ」へ

山田 健 三

目次

0. はじめに

1. sneezingを表す語

2. sneezingをめぐる俗信の変遷

3. 「くさめ」の民衆語源

4. 「くしゃみ」の成立

0. はじめに

本稿は「くしゃみ」という語が辿った歴史的遷化を、専らその要因を探るという形で記述しようとするものである。

「くさめ」が「くしゃみ」という、その変化のなれの果てとして、そういう形態をとった経緯は、その外面を見る限り、①-sa->-sja-、②-me > -miという第2・3音節の歴史的交替であった。そしてそれはそれとして1つの記述であろうが、就中①については未だ決着を見ないサ行子音の音価の問題に関わることも事実である。つまり、仮名表記としての変化(さ>しゃ)があったのみで、音の方には何の変化も起こっていないのかも知れない。未だ『節用集大全』(1680)『書言字考節用集』(1717)に「クサメ」と書かれた時代、既に『日葡辞書』(1603)にはCuxamiとあるから、仮名表記と音価の間のずれは、拗音が一個の音韻として確立していない時代のことなれば、文字通りには判断が難しい。否、たとえば sja が日本語の音韻としてその座を得ていたとしても、人の手に掛かる表記の意識の方とは言う、仮名遣いを越えて正書法の問題、つまり語の表記として「くさめ」を選んでいたので

ないか。ここにそのことを窺わせる資料がないではない。柴野栗山の手になる『雑字類編』(1764)は、その凡例に「此書ハ事ヲ記シ実ヲ録スル為ニ、編タル書ナレハ只質実的切ノ詞ヲ専ニ輯テ陰私鄙俚ノ詞ヲモ不忌シテ載タリ。但華藻文飾詩賦ノ詞ハ不載」とあるとおり、事実を記載しようとした辞書である。この書に今我々が問題としている語は「クシヤメ」(4/15ウ)と記されている。このことは、sjaの一個の音韻としての、また拗音表記の確立をよそに正書法が介在していることを窺わしめる。本稿では、一旦そういった音韻史の問題から離れて、ことがらとしての「くさめ」との関わり合いから、ことばとしての「くさめ」の語史を捉えてみたい。

1. sneezingを表す語

くしゃみをする行為(sneezing)そのものについての名称は、現代では「くしゃみ(を)する」といった説明称によって実現されるが、この名称は古代においては異なる様相を示していた。「はなひる」―鼻を放る―と sneezing を捉えていた。sneezingという生理現象が古代人にも現代人同様存在したことは、ここに疑いのないこととして、写された方の言語表現が、最早「はなひる」を捨てて「くしゃみ(を)する」へきたった経緯は、「くしゃみ」の前身である「くさめ」という語の出生を明らかにしなければ、もとより分かつはるはずはない。

2. sneezingをめぐる俗信の変遷

「くさめ」の出生を明らかにする前に、「くさめ」誕生以前から存在した sneezing を我々の祖先はどう見ていたかを概観することにする。具体的には、sneezing をめぐる俗信を手掛かりにしていく。

「万葉人は sneezing を好ましく見ていたようである。」

- 眉根搔き鼻ひ紐解け待つらむか何時しか見むと思へるわれを(2408)
 - うち鼻ひ鼻をそひつる剣刀身に副ふ妹し思ひけらしも(2637)
 - 眉根搔き鼻ひ紐解け待てりやも何時かも見むと恋ひ来しわれを(2808)
 - 今日なれば鼻の鼻ひし眉痒み思ひじことは君にしありけり(2809)
- これらの短歌は、sneezingに寄せて、恋人への思いを陳べている。ここに sneezing

が恋人に逢えるという吉事の予兆であるという俗信が読み取れる。

ところが平安朝初期の成立とされる『琴歌譜』に見えるsneezingの歌は、
○つぎねふ山城川に蜻蛉あひ嚏ふくあひ嚏ふとも我が愛者に逢はずは止まじ
「はなひる」は先の『万葉集』の例でもそうであるが、上代においては「はなふ」という二段動詞であった。その点から、この『琴歌譜』の例は上代の語法を未だ伝えるものとして注目されるのであるが、sneezingに関する俗信の方は『万葉集』とは異なっている。「くしゃみをして、愛しい人に逢わずにいられない！」— 凶事の予兆として捉えられている。

sneezingを不吉なものとする例は『古今和歌集』『枕草子』など平安朝を通じて見られ⁽²⁾、中世に到ってその不吉度は増す。『徒然草』47段では、sneezingは〈死〉にまで結びつけられている。

○或人、清水へまゐりけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら「くさめくさめ」と言ひもて行きければ、「尼御前、何事をかくはのたまふぞ」と問ひけれども、答へもせず、なほ言ひやまざりけるを、度々問はれて、うち腹立ちて、「やや、鼻ひたる時、かくまじなはねば死ぬるなりと申せば、養ひ君の、比叡山に兒にておはしますが、ただ今も鼻ひ給はんと思へば、かく申すぞかし」と言ひけり。有り難き志なりけんかし。(pp. 129-130)
最大級の凶事〈死〉の予兆として捉えられている。そこで呪文(くさめ)が必要とされるのであるが、その事は次章で触れることとして、今暫く俗信の跡を辿っていくこととする。

近世になると、ぐっと現代の感覚に近くなる。京伝の『江戸生艶気樺焼』では、
○艶二郎くしゃみをするたび、世間でおれが噂をするだろうとおもへども、い
ろかうに町内でさへしらぬゆへ此のうへは女郎買をはじめて、うき名をたて
んとおもい…… (pp. 141)

他人が自分のことを噂する。『徒然草』の〈死〉など微塵にも感じられない。現代の「一にほめられ、二にそしられ、三にほれられ、四に風邪ひく」といった諺に通じる。

以上をまとめると、上代においてはプラスの俗信として捉えられていたsneezingは中古に到ってマイナスの俗信となっていく。更に中世には〈死〉を連想させるほどの大凶事の予兆として捉えられていく。しかし、このマイナスの俗信は近世に到

って、現代とほぼ同じく、プラスにもマイナスにもなる中立的な意味合いしか持たなくなっていた。

こういった俗信の吉凶の流転がどのような要因によって起こったかは、それ自体興味ある社会史のテーマと成り得るが、ここは言語史を扱う場所であるので、これ以上の議論に渡ることは避けたい。ただ事のついでに申し添えておくならば、sneezingそのものを捉える民衆の心理には、それを吉と見るか、凶と見るかということを含み込んだ、何か放って置けない、何かしら意味を持たせたい、そういうものとして映ったことは確かである⁽³⁾。

3. 「くさめ」の民衆語源

sneezingをマイナスの俗信として捉えるようになった時代、中古には、それによる凶事を防ぐ為のまじないが生まれた。『枕草子』28段には、

○にくきもの。(中略)はなひて誦文する。おほかた、人の家のをとこ主ならぬは、たかくはなひたる、いとにくし。(pp. 71)

この〈誦文〉は『二中歴』の「呪術歴」の項にある「鼻嚏時誦 休息万命急々如律令」(pp. 160)を思い起こさせる。「急々如律令」というのは道教の呪文であり、悪魔を退散させる文句として用いられるものである。この呪文を記した木簡が日本各地で発掘されており、道教が日本にも伝わっていた証拠となっている⁽⁴⁾。このまじないの為の文句は近世あたりの曆書などにも記されており、永く用いられたようである⁽⁵⁾。

さて「休息万命急々如律令」が、sneezingを悪魔の仕業とみる人々に、それを追いつく呪文としての「くさめ」の語源と解釈されることとなった。『名語記』にこうある。

○鼻ヒタル時 クサメトマシナフ如何 コレヲハ九足八面鬼トトナフレハ短ヲウカ、フ鬼 ワカ名字ヲイハレテ 害ヲナサス 逃去トイヘル義アリ 又休息万命急々如律トトナフヘキヨクサメトハイヘリトイフ説アリ(8・27ウ)

既に「くさめ」がまじないであることは『徒然草』47段の例で明らかであるが、その語源解釈をこの道教の呪文に結びつけたものとしては、この『名語記』あたりが古いところである。しかしこの語源解釈はひとり『名語記』に見えるのではなく、

後世の『安斎随筆』にも見える。

○(前略)クサメと云ふはハナヒル事には非ずハナヒル時のまじないの詞なり
又下賤の人はハナヒル時まじなひなりとてクソクラへと云ふ拾芥抄に噓時の
頃に休息万命急々如律令とみえたり休息万命をクソクマンミャウとよむを誤
り伝へてクソクラへと覚えたがへたるものなるべし (pp. 435・噓のまじなひ)
ところでこの記事には注目すべき点が2つある。1つは、冒頭の文章から察知で
きるように、伊勢貞丈の時代には「くさめ」が一般にはまじないではなくsneezing
として捉えられていることである。このことは「くさめ」の意味変化を物語るもの
であるが、そこには「くさめ」ということばに対する意味の矯正直しがある。それは
民衆語源にはほかならない。狂言には留め(終曲)の演出形式の1つに「くさめ留め」
と呼ばれる留めがあって、その際「くっさめ」とくしゃみをするのであるが、この
「くっさめ」は現代で言えば、「ハクション」にあたる擬声語なのである。狂言に
は擬声語が豊富に現れるが、この「くっさめ」もその1つである。つまり「くさめ」
は少なくとも中世末の口語の世界ではsneezing soundとして捉えられていたことは
確かであろう。そして又そのハクションにあたる「くさめ」が「くさめする」(=
ハクションスル)という形で用いられるようになった(『節用集大全』など)。小
稿の冒頭でも触れた通り、「くさめ」はその正書法によってなかなか口語の世界で
のありようを示さないが、『日葡辞書』『雑字類編』の記事は口語の世界の徴証と
して考えられる。「くさめ」が呪文を離れて音象徴の世界へはいりこんできたのは、
「くさめ」という語源不詳の語に合理的な解釈を加えんとした、それ自体は誠にも
っともらしい、しかしえせ語源である。

○按にクサメとは鼻を嚏時「クサメ」といふゆゑ也今俗「ハアククショウ」と
いふは「ハアクサメ」の訛也「ハア」も発音也(高田与清『松屋筆記』巻64
pp. 421)

○くさめ(第二上)名〔噓〕〔其体ヲ似寄リノ音調カラ形容シテイフ語〕。
……=クシャミ。=ハナヒリ。(山田美妙『日本大辞書』1893)

こういった音象徴起源として意識されるようになった「くさめ」は、ついには正
書法を越えて「くしゃみ」へと、その口語の噴出をささうことになったと思われる。
このsneezingという生理現象を言語に写す際、sという音は最も好ましい。「く
しゃみ」のくしゃみらしさはやはりその〔s〕という音にある。

そして更に1つの注目すべき点は、庶民たちがクソクラへという文句をまじないとして用いていたということである。クサメとクソクラへの接点がここに見出せる。

ならば「くさめ」の語源は何か。この点に関しては柳田国男の卓論がある。

「いまある辞典や注釈の本を見ると、クサメという語の起りは、休息万命、急々如律令と言ふとなへごとを、まちがへたものだ、どこにも出てゐる。そんなおろかしい説明をまに受けて、ちっともうたがはない人があるのだらうか。休息万命なんかは、漢字を知ってゐる者にも、なんのことを言ふのかまるでわからない。さうしてまつたく字を知らぬ者が、じつはむかしから、クシャミをおそれてゐたのである。(中略)クサメの糞はめであり、クソクラへと同じ語だつたことは、気をつけた人がまだないやうだが、おほよそはまちがひがあるまい。」(柳田1957 pp. 462-463)

「くそめ(糞食め=糞食らえ)」が「くさめ」の語源であるという。kusohame > kusameという音変化はありうべき変化である。この語源解釈について何ら付け加える材料は持ち合わせていない。が、「糞食め」という口語の世界を離れて「くさめ」は成立したわけで、一旦成立した呪文としての「くさめ」が再度口語の世界での洗礼を受けて、「くしゃみ」という今日の姿になったのである。

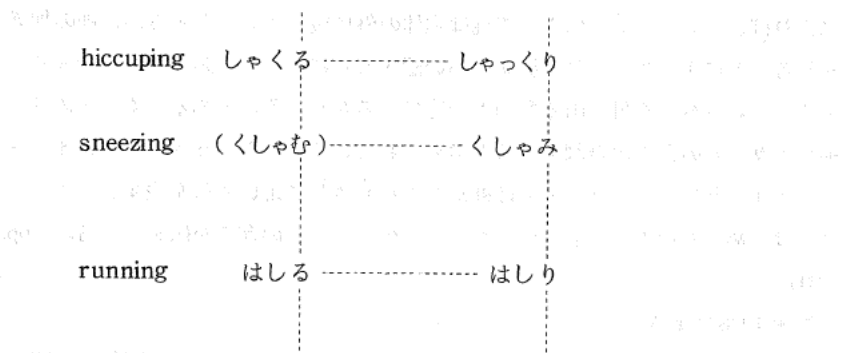
4. 「くしゃみ」の成立

さて、冒頭で述べた①の点に関して以上述べきたったわけであるが、この記述に大きな誤りはないにしても、言語史の記述としては不十分であることは否めない。表記としての拗音の定着の問題としてサ・シャの交替という更に大きな問題がある⁽⁹⁾。この問題を離れて「くさめ」のみを論ずことは慎まなければならないであろう。ただ「くさめ」の担う意味の歴史がひとしなみではないことを考え併せる時、音と意味の結び付いているところに、つまり「くさめ」という語それ自体に、「くさめ」から「くしゃみ」に到る変化の条件が、やはりあると思われる。

最後に②についての解釈を示しておきたい。

この問題は、とりあえず①とは別に、その変化のプロセス・要因を考えるべきであろう。それは、①と②が何ら相互に関わり合いを持たないと考えるからではなく、

— むしろ私としては積極的にそのかわりを説きたい — 話の筋としての混乱を避けたいからにはかならない。そこで話を戻すならば、②については〈群化の欲求〉で解くべきと考える。但し確かな証拠を示すことができないので、はなはだ心許ないが、ここに「はなひる」にあたる口語の世界での「くしゃむ」という動作語（四段動詞）を想定してみよう。そういう語が名詞化する場合、連用形がその役割を担うことは多くの語が示すところである。「走る」が「走り」、「恵む」が「恵み」、「たくむ」が「たくみ」など。枚挙に暇はない。そういった中で特に注目したいのは、同じ生理現象である「さくり」である。この語は「さくる」の名詞形であり、現在では「しゃっくり」である。この語の場合もサ・シャの交替という現象を等しく持つ語同士であり、更には同じ生理現象というものを担う語同士なのである。こういった条件が「くしゃみ」を生ぜしめる下地となる。蓋し「くしゃむ」などついで存在しなかったとしても実は構わない。不均衡な体系であっても、そこに働く〈群化〉の力は〈類推〉によって、つまり「さくり(しゃくり)」などのi語尾名詞グループに与するという力が、「くしゃみ」成立の要因としてある。図に示すような形態のレベルでの体系が考えられ、そういった張り合いが、元来まじないとして存在したこの語を、擬声語もしくは擬声語起源の語として意識される、そういう1つの普通名詞としてのパスポートを「くしゃみ」とすることで与えたわけである。



以上①②それぞれについての解釈をここに示してきたが、両者を結ぶ接点は、今最後に少しく触れよう。「くさめ」が呪文から離脱して音象徴の世界へいわば紛れ込んだ時、一方ではsneezingを担う語としての機能を果たすこととなった。「くさめする」(ハクションスル)といった〈幼い〉表現がそれにあたるわけで、つまり音

象徴の世界に入り込んでしまうことにはならず、少なくとも擬声語起源の語としてでも、普通名詞の位置を占めることになった。大きなタイムスパンをとれば、ハナヒル>クシャミスルという、語の歴史的交替があったのであり、その交替劇は①②という、結局は共に普通名詞化 — ハナヒリ(ハナヒルの名詞形)に替わってクシャミが普通名詞としての位置を占める — に繋がる力によって起こったと思われるのである。

注

- (1) ここで言う「正書法」は「一語一語の書き方についての、個別的な問題」で、「仮名遣い」は「文字の使い方」とする『日本語の歴史7』（亀井孝ほか・平凡社1965 pp. 186）の見解に従う。
- (2) 『古今和歌集』巻19(雑体)に
○いでてゆかん人をとどめむよしなきにとなりの方にも鼻もひぬ哉(1043)
とあり、マイナスの俗信がやはり窺える。『枕草子』には28段(にくきもの)に例があり、それについては本文中(3章)で触れる。
- (3) sneezingに何かしらの意味を付与するのは日本に限らないようである。アト・ド・フリースの『イメージシンボル事典』（山下圭一郎ほか訳・大修館書店1984）によれば、「くしゃみによって魂は肉体の外に抜け出ようとするが、神の加護を祈ることによって、または鼻をおおい隠すことによって、防ぐことができる。くしゃみは激しく外へ出る息の1形態であるから、不吉である。くしゃみは一般に神々からの警告の合図であると考えられている。」というマイナスのイメージを示すと共に、「ギリシャでは神からもたらされるよい兆しを表す。」「ローマでは、めでたい挨拶。」といったプラスのイメージの存在を伝えている。(pp. 589)
- (4) 福永1986による。
- (5) 安政年間に成る『安政雑書万暦大成・全』（江戸馬喰町二丁目・宋林堂。架蔵。）には「咒符秘伝」として、「男に縁付早き守」「虫歯の痛を止る守」などがあり、それぞれに「急々如律令」の文句が用いられている。
- (6) 柳沢淇園の『ひとりね』（1725頃）に次の記述がある。
○くさめくさめといふに、いろいろの説有。つれづれの抄などにくわしくあれ共、

皆いりほがなる説にて、後にこしらへたるものの様に覚ゆることなり。諸しかも
供息来などの説はあまりに付け過たるものの様に覚ゆる也。(pp. 94)

(7) 天竜川流域の地域で数年来方言調査を行っているが、当該地域では広く「くしゃみ」をハクシャミという。これなどは音象徴との関わりを更に感じさせる語形である。この語をハクションとクシャミのコンタミネーションで解くことは穿ちすぎかも知れないが、少なくともハクシャミの音象徴性は、インフォーマントの内省、「ハクシャミというからハクシャミだ」という語源意識（民衆語源）によって裏付けられる。

(8) クシャミとハクション（くしゃみの擬声語）にあたる外国語の例をここにいくつか示しておこう。英語の場合、クシャミはsneezing、ハクションはah-choo、kerchoo、tishew、ロシア語の場合、それぞれcixán'e、cix、また韓国語（ソウル方言）の場合、それぞれcaychayki、echiという。ここに共通する音は〔ʃ〕とか〔ʒ〕という破擦音・摩擦音である。この生理現象に関わる語にこういった音が用いられることは恐らくユニバーサルなことで、日本語の場合も例に漏れない。

(9) 小川1985参照。

使用テキスト

『万葉集』（大系6）・『琴歌譜』（大系3）・『古今和歌集』（大系8）・『枕草子』（大系19）・『二中歴』（改定史籍集覧23・近藤活版所）・『徒然草』（全集27）・『江戸生艶気樺焼』（大系59）・『ひとりね』（大系96）・『松屋筆記（第一）』（国書刊行会）・『安斎随筆』（新訂増補故実叢書8・吉川弘文館）・『名語記』（勉誠社）・『邦訳日葡辞書』（岩波書店）・『恵空編節用集大全研究並びに索引・影印編』（勉誠社）・『書言字考節用集研究並びに索引・影印編』（風間書房）・『雑字類編 影印・研究』（ひたく書房）・『日本大辞書』（復刻・ノーベル書房）

※引用に際して、仮名遣いはそのままとしたが、一部踊り字を仮名に改めた箇所があり、旧漢字は現行の字体に改めた。

※大系=日本古典文学大系（岩波書店）、全集=日本古典文学全集（小学館）

参考文献

小川栄一 1985 サ・シャの文替—拗音日本語化の過程—『福井大学教育学部紀要』34
福永光司監修 1986 探求・日本の道教遺跡—人形—『朝日新聞 1986.4.30夕刊』
柳田国男 1957 クシャミのこと『少年と国語』創元社（但し本稿では『定本・柳田国男全集第20巻』筑摩書房 1970 を用いた。）

付記

注 8 でのロシア語・韓国語の例は北上光志氏を通じて、それぞれネイティブスピーカーの方に教えて頂いた。記して感謝致します。

この論文は、2016年10月13日、名古屋大学大学院後期課程（1986.10.13）で発表された。

この論文は、2016年10月13日、名古屋大学大学院後期課程（1986.10.13）で発表された。